

社団法人ゴルファーの緑化促進協力会調査研究

環境と人にやさしい ゴルフとゴルフ場

第15回

自然環境を育むゴルフ場を目指して

千葉廣濟堂カントリー倶楽部



平成 19 年に「環境大臣賞」受賞

— G G G 設立元年から加盟 —

千葉廣濟堂カントリー倶楽部（以下千葉廣濟堂 C C）は、昭和 40 年 10 月に開場した歴史あるゴルフ場で、千葉県市原市という気候の温暖な房総半島の内房に位置する。また、その場所は歴史的な要所でもあり、古くは「上総」と「下総」の国境で、ゴルフ場の敷地内には鎌倉古道への分岐点として『庚申塚』も祭られている。

その千葉廣濟堂 C C では、理事長以下、倶楽部をあげて樹木を大切に、自然環境を育てる取り組みに力を注ぐ。その取り組みは早く、社団法人ゴルファーの緑化促進協力会（以下 G G G）が設立された昭和 51 年の設立元年から加盟。廣濟堂グループ全体の方針もあり、G G G を通して緑化活動、社会貢献活動にも積極的に参加している。そして、G G G に入会して 30 年目の平成 19 年、それまでの功績が評価され、平成 19 年度「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞した。



抵抗性マツの苗木

自然環境を育む千葉廣濟堂 C C において、その環境活動の中心人物として長年携わっているのが、前総支配人の前後（ぜんご）保氏だ。同氏は 2 年前に退任されたが、現在でも顧問として同倶楽部を見守り続けている。

では、同倶楽部におけるこれまでの活動実績や同氏の樹木に対する想い、また、その想いを受け継いだ現在の活動状況を紹介したい。



毎年 300 本のマツを植樹

— 春には「桜祭り」を開催 —

千葉廣濟堂 C C といえば、今年で 28 回を迎えた女子プロトーナメント「廣濟堂レディース

ゴルフカップ」が毎年開催されるコースだ。テレビ中継でブラウン管越しに観る同倶楽部は、5月の終わりという開催時期もあり、緑豊かな印象が強い。中でも最終18番ホールに使用される西コースの9番は、ホールの両脇に奥行きを醸し出す林が綺麗に並び立ち、グリーン手前には楠の木がそびえ立つ名物ホールだ。

同倶楽部は、79万㎡という敷地の中に27ホールを擁する。その敷地内にある樹木の種類はおよそ80種。針葉樹から広葉樹など様々な種類があるため、新緑や紅葉など四季折々で楽しむことができるという。そしてその様々な木々の中で、どのホールにも必ずある樹木がマツとサクラだ。

マツに関しては、GGGの協力のもと、マツ枯れ病を起こしにくい『抵抗性マツ』を年間300本植樹している。マツの植樹について前後氏は次にように語る。



名物ホールの西コース9番

「日本のゴルフ場にとって、マツはなくてはならない樹木です。そのマツをマツ枯れ病から守り、40年、50年後の後世の人達に残していきたい。私が当倶楽部に勤め始めてから約30年間、毎年300本植樹をしていますが、今後も、ヘビーラフや法面などの今ある敷地を有効活用し、将来的には2万本は植えたいですね。マツを絶やさないよう、植樹は続けたいと思います」

抵抗性マツを植樹してからは、マツ枯れ病による被害はなく、また、マツの世代交代をスムーズに行うため、高齢なマツの下に若いマツの苗木を植えるなどの工夫もされている。

同氏にとっては、サクラの木も思い入れが強いようだ。同氏が「サクラは日本の象徴」というように、現在、同倶楽部にあるサクラの本数は4000本あり、元々自生していて50～60年経ったものが1600本、そして過去20年間で2400本植樹している。驚くべきはその品種の数で、主力はソメイヨシノだが、希少種の『房総桜』など27品種にも及ぶという。「春という季節において、地域の方々との気持ちが一つになれるのがサクラの効力です。毎年3月下旬から4月上旬の2日間、地元の方を招いて桜祭りを開催しています。それによって地域の活性化に繋がればと考えています。近隣には、これほどのサクラを見られる場所がないため、当倶楽部をサクラの名所にしていきたいですね」(前後氏)



自然を通して地域社会に密着

ーゴルフ場が果たせる役割とは？ー

千葉廣済堂CCでは、緑によって様々な効果がみられる。

一つは、多くの樹木がゴルファーの熱中症を予防していることだ。コース内の至る所で木陰ができるため、夏場での熱中症予防に大きく貢献し、ここ数年では熱中症患者は一人

も出ていない。さらに、メンバーも高齢化していることでその重要性は増しているという。また、豊富な緑の中では森林浴ができ、癒しの効果もあるのでゴルファーからの評判もいよいよだ。

さらには、同倶楽部で使用する水にも表れている。レストランで使用する飲料水や芝への散水などは井戸水を使っているが、その井戸水は水質検査で行政からもお墨付きをもらえるほど、不純物がほとんど含まれていない水質だ。これについて前後氏は、「樹木との直



可愛らしいマツの苗木が並ぶ

接的な因果関係はわかりませんが、緑を増やし自然を育てている結果として、このような綺麗な井戸水を使用できるのだと思います。この水は当倶楽部の自慢です」と語る。ゴルファーの中には、わざわざその水を汲んで持ち帰る人もいるほどだ。

自然による効果はそれだけではない。地域との繋がりも見逃せないだろう。ゴルフ場の豊富な緑は、ゴルファーだけでなく近隣の住民にとっても大切な空間に

なっている。前後氏に代わり 2 年前から支配人を務める神田徳也氏も自然環境への意識が強く、赴任後間もなく、課外授業の一環として近隣の小学生にゴルフ場の開放を始めている。神田支配人は「子供達に芝生や樹木などの緑に触れあってもらい、自然というものの大切さや、自分たちの町にはこのような緑豊かな施設があるのだということを知ってもらいたい」と、その意図を語る。前記の桜祭りや近隣の小学生の受け入れなど地域との密着が深く、ゴルフ場にある自然が、ゴルフ場とその周りの地域とを結んでいるといえる。

最後に、前後氏と神田支配人にゴルフ場における緑の重要性を聞いた。

「第一は、良い自然環境の中で健全なゴルフを楽しんでもらいたい。そして、我々が昔の環境を壊してゴルフ場を造ったのだから、それを自然に還す努力を惜しんではいけません。木を1本切ったら2本は植える姿勢が大切です。また、自然環境を通じて地球の温暖化防止と地域の緑化に貢献しなければなりません。ゴルフ場は地場産業なので地域社会と離れての営業は厳しい。環境というものを育てることにおいて、子供からお年寄りまで利用できる施設でなければならないと思います」



フェアウェイをセパレートする抵抗性マツの成木